

枠を変える Mission Two: 世界に向き合うために

沼野 充 義 (東京大学)

地域研究と世界

私は文学を専門としていますので、文学あるいは文化の視点から見て、当プロジェクトに何を期待するかということをお話しさせていただきます。特にペレストロイカ以降、人文科学研究の分野に起きた変動と、自分がそれについてどう考えてきたかということ振り返りながら、今後スラブ・東欧を含む地域の研究がどう世界と向き合っていけるのか、またそれをどう未来につないでいくべきかについて、お話をできればと思います。

今日の私の報告は「枠を変える Mission Two」という題になっています。大きな社会変動があって、思考の枠組みに変更が必要となったとき、研究者が最初に果たすべき任務としてその枠を変えることを Mission One とすると、これはペレストロイカからソ連邦崩壊のしばらく後までの課題でした。それまでスラブ圏の地域研究者は、対象地域をソ連・東欧と言っておればそれで済んだ。基本的には社会主義圏の研究と言ってもよかったです。それがなくなってしまった以上、いったいどういう枠組みでとらえたらいいのかという問題が生じてきました。それまで東欧と呼ばれていた地域に関しては、東欧ではなく中欧というべきだという議論が出てきましたし、旧ソ連はばらばらになってしまっていて、バルトやコーカサスや中央アジアに分かれてしまいました。こうした地域を全て含めて研究するにあたって、枠組みの変更という問題が我々を直撃したわけです。学会に関してても、ロシア・東欧学会という名称が今でもそのまま使われていますが、果たしてこの名前がいいのかとかといった問題は残っていて、まだ完全に克服されたわけではありません。

この Mission One が我々に突き付けられたとき、そこに浮かび上がってきたのは、これまで私たちがソ連・東欧という地域を研究していながら、実はそれが社会主義であるということにかなりの部分を負っていて、社会主義圏の研究をしていたということでした。そしてその社会主義という枠が外されたとき、例えばロシアをやっている人間はソ連という社会主義国家を研究するのではなくて、ロシアそのものに向き合わなくてはいけなくなりました。ロシアという地域を研究する人間にとって、ロシアとは何かという問題、あるいはもう少し厳密に言うと、「ロシア性」(ルースコスチ)とは何かという問題が、究極的な課

題として浮かんできました。

この「ロシア性」というのはちょっと変な言い方ですが、ロシア・フォルマリズムの議論を参考にすると分かりやすいでしょう。かつてロシア・フォルマリズムの文芸研究者が、文学とは何かということを経験する場合に、文学の本質というのは「文学性」(リテラトゥルノスチ)にあるとしました。この「文学性」、つまり文学を文学たらしめているものを研究して極めるのが文学研究であって、それ以外に文学に含まれる枝葉末節の真理とか社会風俗等をいくら研究しても、文学を極めたことにはならないと。これに倣って言えば、社会主義という枠を外した上でロシアとじかに向き合った場合、ロシアとは何かを示す「ロシア性」を、いったいどうすれば捉えることができるのかという問題が、我々に突き付けられたのだと思います。

その一方で、あの人はインド研究者、あの人はロシア研究者と言っていれば、話は分かりやすくてよろしいとなるかということ、実はそうではないということは、地域研究をやっている皆さんはお分かりでしょう。ある一つの外国語だけでも、本当に極めようと思ったら、それこそ一生かかっても極められない。一つの国を本質的に理解するのは、一生かかっても成し遂げることのできない大変な仕事です。しかし、専門の一カ国あるいは一族だけ研究していても、その民族や国の本質というのは見えてこない。世界の中の位置付けで、他の国と比べてどこが違っているとか同じだということが言えなければなりません。ここに深刻なジレンマが生じてきます。一生かかっても極めることができないのに、あまり一つの国だけにとらわれて研究していると、今度は世界と向き合うのを忘れてしまうという恐れがあるわけです。

今ここにいる人の多くは、日本人として日本以外の外国を研究しています。それ以外の方もいますが、いずれにしても自分の母語とする言語が使われている国以外の外国を研究する方がほとんどだと思います。この場合、必然的に自分の母国と研究対象の外国との二点測量ができるわけですね。しかし、それだけでは非常に危険だということは、多くの研究者が体験上分かっている。研究対象の国のことしか知らないと、それがその国に特殊な現象なのか、それとも他の国でも当たり前のことなのか分からない。ですから、三点測量の視点が不可欠となります。特にロシアは巨大な国で、一旦のめりこんでしまえばそれだけで一生かかっても抜け出せないような対象ですから、注意が必要です。ロシア研究者は時々、こういう面白いことがあるんだよとか言うわけですけど、実はフランスでもイギリスでも結構同じようなことがあったりするわけで、その意味でも三点測量というものは必要であろうと思います。

このように、ペレストロイカからソ連邦崩壊の時期にかけては、社会主義という枠が外されて、それに代わる新しい枠を作ることができるかという Mission Oneが、旧ソ連・東欧の地域研究者に突き付けられました。このことは、文化・文学研究の場合でもまったく同

じで、旧来の制度的なロシア文学史というものの枠を、どう変えることができるかという課題でもあったわけです。それに対して、我々がどれくらい応えることができたかは、今日の話の範囲を越えてしまいます。

文化相対論

今の話の中で、地域研究には比較の視点がどうしても必要であると言いましたが、ただその場合にどのような視点から、どういう姿勢をもって臨んだらいいのかということも、少し考えてみないといけないと思います。

ここで、アメリカの文化人類学者・言語学者であるサピアとウォーフの仮説を取り上げてみましょう。彼らは言語相対論、あるいはそれを少し拡張すると文化相対論の立場を唱えました。これは要するに、人間がこの世界を見る見方というのは、それぞれ固有の言語によって規定されている、ひいては文化によって規定されているというものです。分かりやすく言うと、例えばアメリカ人が英語を使って世界を見る見方と、日本人が日本語を使って世界を見る見方は互いに異なるというのが、言語相対論の考え方です。

これはいまだに仮説と言われている以上、科学的に証明されたとは言い難い。最近の科学的な言語学者は、むしろこの仮説を否定する傾向にあります。しかし、比較文学とか比較文化をやっている人間から見ると、人間の思考や行動のパターンが、その母語とする言語や出身国の文化によってある程度影響を受けているというのは、たとえ科学的に立証されなくても自明のことにように思えます。ですから、文化の研究者と科学的な言語学者との間には、一定の乖離があります。

ところで、ポーランド出身の言語学者でアンナ・ヴィエジュビツカ (Anna Wierzbicka) という人がいます。その主著の一つに *Understanding Cultures Through Their Key Words* (1997) が挙げられる言語学者ですが、彼女は例えば「友情」とか日本語で言う「甘え」、「故郷」、「愛」等に当たる言葉を、日本語の他に英語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語などの言語において、非常に詳しく意味論的に比較分析しています。それによって彼女は、どこまで人間は文化を超えて共通しているのか、どこからが違うのか、普遍的な要素があるとするれば、それは何なのかということも、かなり突き詰めて意味論的に研究しています。ヴィエジュビツカの著作は、私にとってこの数年<マイ・ブーム>でありまして、大学院などでも学生たちと読んでいたのですが、彼女の立場は広い意味で言うと、弱い言語相対主義と言えると思います。

と言うのも、よく言語相対論には強いものと弱いものがあると言われるのですが、強い言語相対論になると、言語が違えば人間の考え方も全然違うので、お互い理解できないというくらい極端な話になってしまいます。しかし、我々が文化を比較する場合には、ヴィ

エジュビツカのようにある程度弱い相対主義の立場に立って、それぞれの文化が普遍的なものかどうかを、具体的にきちんと立証していくという姿勢が必要なのではないかと思います。これから行われる巨大なプロジェクトでは、比較の視点が必要だということがこれまでも強調されていますが、その場合にもこのことについては基本的に考えなければいけないことであろうかと思えます。

最近、心理学者の高野陽太郎さんが『「集団主義」という錯覚』という本を出しましたが、大変面白い研究で、読んでいた目からうろこが落ちるような思いがしました。これまで欧米の人たちによって、非常にたくさんの日本人論が書かれてきましたが、その典型ともいえるルース・ベネディクトの『菊と刀』以来、日本人論のステレオタイプが作られてきました。日本人は和を重んじ集団主義的であって、個人の突出したことを抑える社会であるというもので、これは例えば中根千枝さんのような文化人類学者の研究にも、ある程度引き継がれていきます。ところが高野さんは、心理学者の立場から、これがどうも思い込みによる錯覚であって、誤ったステレオタイプではないかということ、かなり科学的に立証しています。つまり関連する心理学の研究を緻密に比較分析していくと、アメリカの方が日本人よりも個人主義的だと証明できる科学的な根拠など全くないということが、この本では書かれています。かといって高野さんは、日本人の方が個人主義的だとか、アメリカの方が集団主義的だと結論付けているわけではなくて、そのようなステレオタイプで物事を判断すること自体、科学的根拠がないということを言われています。これについては私ももっともだと思いますし、こういった視点が、比較をする場合にかなり大事なのではないかと思えます。

世界文学論

次に世界文学論についてお話します。文学を地域研究に入れるかどうかは若干疑問ですが、我々が通常文学研究と言っているのは、ある地域のある言語によって書かれた文学を扱う研究です。

ここでジレンマに陥りやすいのは、あなたはロシア文学を研究しているのはいいけど、ではどうしてロシア文学だけに興味を持って、フランス文学やインドの文学を読まないんですかと問われた時に、何と答えるかです。おかしいじゃないですか、同じ文学なのに、とそういう話になるはず。そもそも文学とは、あるいは文化と言い換えてもいいのですが、どこまで普遍的なものなのか、どこまでが固有の文化体系の中でつくられているものなのかという疑問が、このとき生じてきます。

プラクティカルに言えば、文学というのは基本的には何らかの言語で書かれているわけですが、人間誰しも言語的な能力の限界があります。それに対して、英訳を使って読めば

いいじゃないかという議論も出てくるかもしれませんが、文学研究者が最後の牙城として
いるのはやはり言語ですから、英訳で村上春樹を読めば日本文学は分かると言われても、
ちょっとそれはないだろうというのが、まともな文学研究者の本音ではないかと私は思っ
ます。

ただし、原文で文学が読めるくらい言語能力を磨くのは、並大抵のことではありません。
自分の母語以外に一カ国語でもできればそれだけですごいことですが、二カ国語、あるい
は三カ国語で文学が読めるかとなると、普通の人にはなかなかできません。まして、世界
中には何百、何千の言語があるわけで、その全部が読めるなんて人はいるわけがありませ
ん。しかも、言語の数だけじゃなくて、世界中で書かれている文学の量というのは圧倒的
な量で、とても個人で読み切れるようなものではない。こういった世界の圧倒的な物量的
巨大さの前では、個人の研究者はまったく無力なものです。

だからある意味では、地域研究者として私はこの専門ですというのは、自分の身を守る
ためには大変都合のいい鎧になるでしょう。でも現実には、ロシア文学の専門ですと言っ
ただけでも大きすぎるので、ドストエフスキーの専門ですと言わなきゃいけない。しかし、
ドストエフスキーでも実は巨大過ぎて、研究文献だけでもおそらく一生かかっても読み切
れないくらいになっています。だから、私はドストエフスキーの何とかという小説の何と
かというモチーフについては専門家です、といった具合になってしまう。そうして研究が
細分化され深まっていくのですが、逆に研究者が大きなものに向き合わなくなってしまっ
た。果たして文学研究者はどうすれば世界に向き合うということができるのかということが
が、ここで我々にとっては大きな問題になっていくわけです。

これは文学という枠を超えて言えば、地域研究者、すなわちある特定の言語や地域を専
門にしている人が、その特定の言語や地域を超えて世界に向き合うためにはどうしたら
いいのかという問題と同じだと思われまます。

特定の一国の国民文学という枠に縛られるのではなくて、世界文学ということを使う人
が時折おられます。実は私も最近よくそういうことを言っていて、近々『世界文学論』とい
う本も出す予定です。もともとはゲーテがドイツ語の“Weltliteratur”という言葉
を最初に使ったとされていますが、マルクス、エンゲルスなども『共産党宣言』で世界文学
に触れていて、国民文学というものはもう現代ではあまり意味がなくなってきたと述べて
います。人類の普遍的な世界文学の時代が来るというのは、この頃からかなり言われて
いたことですが、実際20世紀を通して、また21世紀になった今日の世界から見れば、
何か一つの普遍的な世界文学が形成されたとは、とても思えません。

むしろ、英語中心によるグローバリゼーションが今後どのくらい進むかという問題は、
大いに議論の余地があるところです。水村美苗さんの『日本語が亡びるとき』とい
う、最近話題になった本などのように、近代文学の言語としての日本語はもう滅びてしま
うんじ

やないかといった、世の中に警告を発するためにわざとペシミスティックな議論をしている方もいますが、現実には世界のいろいろな小さな民族、小さな言語が自分の言語で文学的な表現をしようという試みは、決して廃れていないと思いますね。むしろ、今世界文学という場合には、世界にはさまざまな言語で書くさまざまな民族がいて、それぞれがにぎやかな多様な声を響かせ合っている、そういう多様性を重視するような場としての世界文学というものがあり得ないのかという視点で、考えていく必要があると思っています。

このことに関して、最近欧米では面白い議論が出されていて、国民文学の在り方を「木」、世界文学のダイナミックな在り方を「波」に例え、そこから離れた「遠読」(distant reading)を提唱するフランコ・モレッティのような文学者がいます。その一方でデイビッド・ダムロッシュは、世界文学を「国民文学の楕円の屈折」と捉え、固定的なカノンを設定するのではなく、むしろそれを読む「ちょっと距離を置いた読み方」(detached reading)の可能性を打ち出しています。国民文学の専門家というものは必要だし、その研究は重要であるけれども、それとは別の枠で世界の文学に向き合っていくという方法を模索する試みが、こうした新しい視点から出てきています。

しかし、文学は先ほども述べたように、特定言語によるランゲージ・スペシフィックな領域ですから、言うは易し行うは難しで、もっと広い視点で世界の文学を見ないといけないということは頭の中では分かっているけど、では現実の枠組みとか制度はどうするかとなると、なかなか難しい。大学の文学部を見ると、相変わらず英文学、ロシア文学、フランス文学という枠組みがあって、それが崩されるどころか、むしろそれこそが文学部の最後の砦であるかのような研究室体制が続いているという現状があります。ですから、新しい学問的な意識と制度的なものの間には、常に時間差があるということだろうと思います。

これをどうしていったらいいかということを考える際に、スラブ研究センターのような場で新しい枠組みを作る試みが行われるというのは、非常に大事なことであろうと思います。文学部のような組織は、(私も文学部に所属しているのですが)むしろ反動の牙城として、そういう新しい枠組みに抵抗するというのが使命であるのかもしれない。抵抗がないところにいくら新しいものを作っても、それは多分、あまり大したものにならないでしょう。強い抵抗を跳ね返して作られるものこそが、本当に新しい素晴らしいものとなるのではないのでしょうか。

とどまる力と越えゆく流れ

今までお話ししてきたことを少し総合的に考えると、次のようなことがいえると思います。現代の世界においては、民族やその固有の文化の枠を超えていこうとする越境的な志向性(グローバリゼーションもこの流れの一つ)が一方にあるわけですが、世界がすべて

それにのみ込まれているわけでは決してありません。むしろ、それに対抗するように民族的伝統を守り、その枠内にとどまろうとする力も強く働いています。現代の世界は、この両者の相互作用が織り成す極めてダイナミックなプロセスによって成り立っていると考えられます。

私は今、学術振興会が中心になって行っている人文・社会科学振興プロジェクトの中の、「とどまる力と越え行く流れ」と題された企画に関わっていて、その中でまさにこうした関心に基づいて、現代の文化・芸術の在り方をいろいろな角度から研究する試みに取り組んできました。現在はまさに、越境的な志向と境界内にとどまろうとする志向が拮抗する状況の中で、文化や芸術が従来のカノンを再編成し更新していく、そういう時期に差し掛かっていると思います。

カノンというのは、文学研究で最近わりとよく使われる言葉ですが、もともと宗教などの正典、つまり正統と認められる教義などを表した著作を指しますが、文学や芸術においてカノンという場合には、ある時代、ある国、ある制度の中で価値があると認められた作品の総体を指します。つまり、ロシア文学の場合には、プーシキンからゴーゴリ、ドストエフスキーとかチェーホフ等の古典的作家たちは、皆読むべき価値があるということを我々が各自で読みながら判断しているわけでは決してなくて、最初からカノンとして与えられているわけです。

このことはロシア文学に限らず、日本文学でもそうです。『源氏物語』などは、ある時期までそれほど高く評価されていませんでしたから、カノンはいつも一定であるわけではなく歴史的に変動していくものです。しかし、いずれにせよ古典的なカノンというものがあるって、例えば文学史を書く場合には、カノンに入っている作品を時代順に略述していくという古典的な文学史の様式が、いまだにあまり破られていない。本当は、これには問題があるはずなのですが、大学院の受験などでは古典的な文学史を読まないと受からないといったように、カノン破りの文学史はアカデミックな枠の中に受け入れてもらいにくいという状況がいまだに続いています。

しかし枠組みの上では、実は従来のカノンを更新して新たなカノンを模索していくべき時代に入っています。例えば、カトリオーナ・ケリーというイギリスのロシア文学者がいるのですが、彼女はオックスフォードで出されている“A Very Short Introduction”シリーズの中でロシア文学の解説書を書いています。これが実にびっくりするような書き方で、従来の文学史とはまったく違う視点からのロシア文学へのイントロダクションになっています。具体的に言うと、彼女はプーシキンの「私は人業ならぬ記念碑を建てた」(Exegi monumentum)という一つの詩を取り上げて、この詩から読み取られるさまざまな側面を、ポスト・コロニアリズムやジェンダー論等のいろいろな問題に分けて、章ごとに論じているのです。つまり一つの詩の解釈や分析だけから、ロシア文学の様々な側面を見せていく

という方法になっています。

このように全く新しい試みがされていながら、その一方ではアカデミックな枠組の側がカノンを守ろうとするので、それを更新するのは簡単そうでなかなか難しい。ダムロッシュはある論文の中で、最近の文学研究においてはポスト・コロニアリズムの観点がかもはや常識になっていて、大学でそれを意識せずに文学研究をしている人はいない、ところがその一方で、ポスト・カノンの時代になったかということ、現実には決してそうではない、と統計データを挙げながら指摘しています。彼が示す統計によれば、例えばシェークスピアであるとか、古典的カノンの大作家の研究が相変わらず研究全体の中に圧倒的な比率を占めていて、しかもその比率はむしろ高まっているというのです。こういった中で大学やアカデミックな制度が新しいカノンをどう受け入れ、どう作っていくのかということが、今問われている大きな問題であろうと思います。

普遍性と多様性の間の永遠の往復運動

最後に、文化の固有性に対する普遍性、あるいは民族性に対する世界性についてです。実は、この対立をどう克服するかというのが、おそらく地域研究者の究極の課題ではないかと私は思っています。

言語学者のロマーン・ヤーコブソンは、変化 (variation) の真っただ中における不変性 (invariance) を求めることが、自分にとって十代のころからの課題であったと言っています。ここで不変性=インヴァリヤンスというのは、まったく物事が何も変わらないという意味ではなく、構造主義的な意味で言っているのです、ある構造の中で同じような意味合いを持つものという内容を指しています。このように、多様性と普遍性の折り合いをつけていくということが、文化研究者の課題ではないだろうかと思います。私なりの言い方をすると、文学・文化研究というのは、普遍性と多様性の間の永遠の往復運動であると思います。

あまり普遍性ばかりを強調すると全体主義に陥ってしまうのに対して、多様性ばかりを強調すると、今度は相対主義の虚無に陥る。共通する普遍的なものは何もないのだから、互いに理解することなどできないんだという話になりかねません。このため、例えばロシアのことをやっている地域研究者ならば、ロシアのことに深くのめり込みながら、ある時ふとそこから自分を切り離して、少し距離を置いて世界を見た場合にロシアがどう見えるかを考え、そしてそこからまたもう一度ロシアに帰っていくことを繰り返していく——つまり、普遍性と多様性の間の永遠の往復運動ということしかないのではないかなと思います。

ヨシフ・プロツキーという詩人が、「言語は未来のものであり、国家は過去のものである」

と言っています。これはいかにも詩人的な直感に基づいた言い方で、簡単に説明することはできないのですが、このブロッキーの言に倣って言うならば、制度というのは常に過去に属しています。このことはアカデミズムを見ると分かります。本当の学問は常に未来に属していると思います。話が抽象的になりましたが、これから新学術領域の展開する新しい学問が未来のものであることを期待して、私の話を終わりにさせていただきます。